

特35

777

延喜式祝詞諺解

水野秋彦撰述

中卷

013869-002-9

特35-777

延喜式祝詞諺解

水野 秋彦 / 著

2冊

M17

ABB-0086



水野秋彦撰述

延喜式祝詞諺解

悠紀廼舍藏版

延喜式祝詞諺解中卷目錄

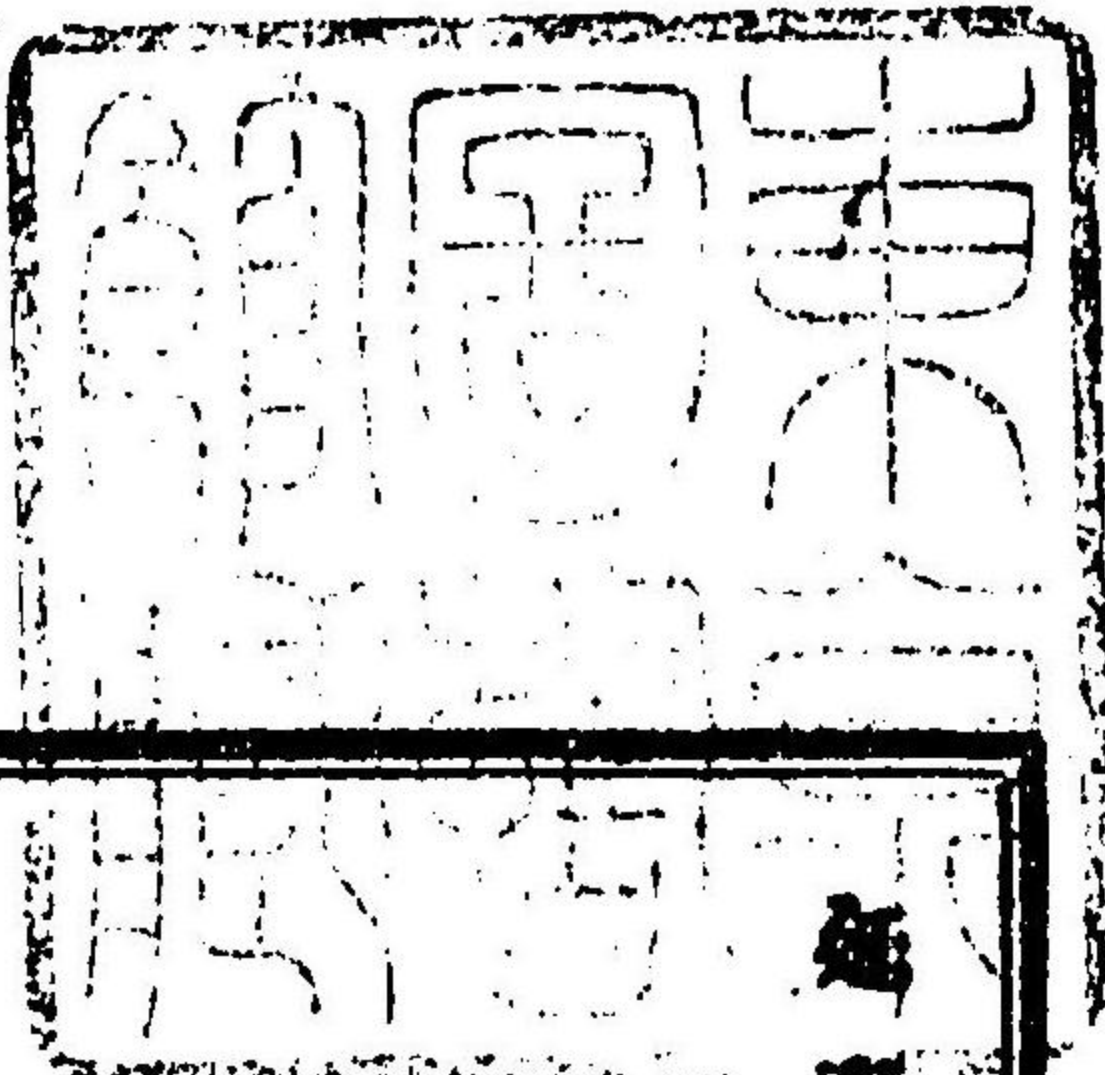
一六月月次	壹丁
一大殿祭	三丁
一御門祭	十丁
一六月晦日大祓	十一丁
一東文忌寸部獻橫刀時咒	二十丁
一鎮火祭	廿一丁
一道饗祭	廿五丁
一大嘗祭	廿八丁
一鎮御魂齋戸祭	三十丁

延喜式祝詞諺解中卷目錄畢

水野秋彦撰述

延喜式祝詞諺解

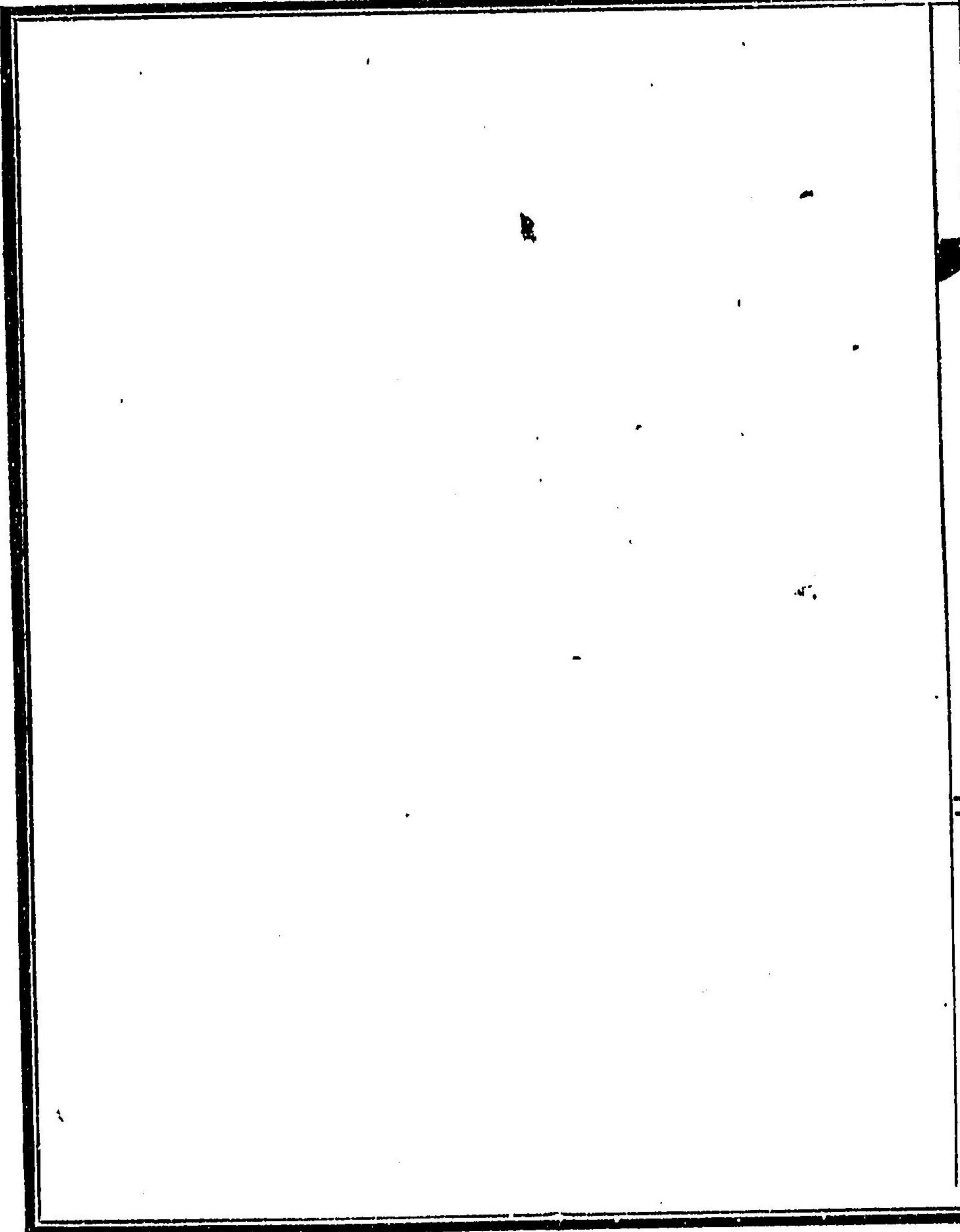
悠紀廼舍藏版



延喜式祝詞諺解中卷目錄

一六月月次	壹丁
一大殿祭	三丁
一御門祭	十丁
一六月晦日大祓	十一丁
一東文忌寸部獻橫刀時咒	二十丁
一鎮火祭	廿一丁
一道饗祭	廿五丁
一大嘗祭	廿八丁
一鎮御魂齋戸祭	三十丁

延喜式祝詞諺解中卷目錄畢



延喜式祝詞謄解卷之中

常陸 水野秋彦撰述  
讃岐 宮崎康斐校閱

○六月月次ミナツキノツキナミ ○六月十一日ナミノ月次祭ノ班幣ハスモ (十二月准コソ)

之ナラフ。十月十一日モ此例ニ准フ實ハ月々執行フ祭故月次ト云フナレド歳ノ半ノ六月ト歳ノ終ノ十二月ニ班幣

スル例ト  
ナレル也

○神祇令云、季夏月次祭、禊祓云、官祭、與祈年祭、同、即如庶人宅神祭也。  
○又云、季冬月次祭、又云、前件云々、祈年月次祭者、百官集。  
○四時祭式云、月次祭、六月十二日十一日。  
○又云、月次祭、集幣、幣案上一神三百四座、並大社一百九十八所云々、右所祭之神、並同祈年、其大神。

集侍神主祝部等諸聞食登宣ウコナハレルカムスレハフリトモモロモロキヨシメセト ○此處全ク祈年祭ノ

宮高御魂神大宮  
女神各加三馬一  
正云々  
年中行事歌合宗  
時朝臣歌云夏の  
くれ年の終に月  
毎のかへりまを  
らの神のみてと

祝詞ト同シ引合  
セテ心得ヘシ

高天原 爾 神留坐 上 皇睦神漏伎命神漏

彌命以 上 天社 國社 登稱 辭竟奉 上 皇

神等前 爾 白 久 月次祭ノ班幣ニ列スル 今年 乃 六月

月次幣帛 今年ノ六月ノ十一日 (十二月者云今年)

十二月月次幣帛 十二月ノ班幣ノ時ニハ此詞ヲ替  
ヘテ今年ノ十二月ノ月次ノ幣帛

ト云 アカシタヘナルタヘコギタヘアラタヘコソナヘマツリ  
氏 色明カニ美シキ  
絹布光澤ノ照テ

清キ絹布絲ノ細ク精シキ和絹絲太  
朝日 乃 豊榮登 爾 全ク祈  
年祭ニ

同シ引合セ 皇御孫命 能 宇豆 乃 幣帛 乎 同 稱 辭

竟奉 久 登 宣 上 同

大御巫 能 云々 祈年祭  
に同シ

座摩 乃 御巫 辭 竟 奉 此の辭竟奉を祈年祭よ  
は稱辭竟奉と作り

御門乃御巫能辭竟奉この辭竟奉も祈年祭  
よは稱辭竟奉とせり

生島乃御巫能云々祈年祭  
よ同し

辭別伊勢爾坐云々白雲乃向伏限此句を祈  
年祭の條

よは白雲能墜坐  
向伏限と作けり

御縣爾坐云々祈年祭  
よ同し

山能口坐云々同  
上

水分坐云々稱辭竟奉久登諸聞食止宣○

登ニ祈年祭條ニ乎  
トセリソレヨロシ

辭別云々祈年祭  
よ同し

○大殿祭天子ノ御殿ヲ祝壽鎮ムル  
祝詞ガヒハギノ延言ナリ

高天原爾神留坐須○天上高天原ノ靈界ニ神ト貴  
ク鎮マリ留ツテ御出遊マス皇親

神魯企神魯美之命以氏○天皇之親族神之君高皇產靈尊  
神之女天照大御神ノ御仲附ノ

古語拾遺云凡率  
造神殿者皆  
須依神代之職  
齋部官率御木  
香二鄉齋部  
伐以齋并堀以  
齋鈕然後工夫  
下手造畢之後  
齋部殿門祭  
乾乃可御坐云々  
又殿祭門祭者元  
太玉命供奉之儀  
忌部氏之所職也  
云云



共に平氣久所知  
食の語へかゝる  
格なりなほさう  
に見過すべから  
す

○講義云食國之用  
もていひ天下は  
体もていへり

○按に今てふ詞は  
自ら上に神代の  
事をいへるに對  
へり

○とど共に汝屋船  
等の句へかゝる  
こと祈年祭御年  
靈神祭中なる格  
も同し  
○按に今てふ詞は  
自ら上に神代の事  
をいへるに對へ  
り

○按に御殿の下へ  
乎のテニナハを  
添へへき事上の

以天津御量 氏 ○天之御孫ヲ以テ ○穗日 事問之 磐根

木根立 知草能可岐葉 乎毛言止 氏 ○音語スマ

天降 利賜比志 食國

天下 登 ○天降遊ハサレタ食ト御身ニ享ケ 天津日嗣所知

食須 皇御孫之命乃御殿 乎 ○天之日嗣ノ御位ヲ享ケ知 食ス皇御真之御事即天子

今奥山乃大峽小峽爾立爾木 乎 前山

奥ノ大ト廣イ山間小ト 齋部能 齋斧乎以伐採 氏 ○齋部ノ 齋清ダ

本末 乎波山神爾祭 氏 ○木ノ本 末ハ

中間 乎持出來 氏 ○木ノ中間ノ處 材木トシテ

齋鉏 乎以氏齋柱立 氏 ○齋部ノ齋清メタル鉏ヲ 以テ穴ヲ堀リテ齋柱ト

皇御孫之命乃天之御翳日之御翳

造奉仕 禮流瑞之御殿 ○齋部 始メ



御殿乎の處にいへるか如しさて上の乎も此處のとも共み汝屋船命へかゝる事も既にへるが如し。謂義云船は大根と申す稱名よて云々。此の謂は次の言壽鎮白久の句へかゝる。

○新年祭條云皇神能敷坐下都磐根謂宮柱太知立云々

諸工等ガ造作仕奉タミツミツト (古語云阿良可) 此ノ殿ノ字チ清潔美麗ノ御殿即御在所カチ

ト訓 汝屋船命 爾 天津奇護言乎  
○汝即御坐屋大根之御事

古語云久須志伊波比許登 此ノ奇護言三字チ古言ニ久須志伊波比許登ト

訓 以 氏 天之奇妙護言ト稱スル古言壽鎮白久 言ニ述ベ代ノ祝詞ノ祝言チ以テ 壽祝テ其

御殿チ鎮 此 乃 敷坐大宮地底津磐根 乃 極 美  
メ白スハ

此ノ屋船命ノ領知マス御所即大宮地ノ宮 下津綱根 下之綱根即柱チ掘入タル底之岩石ノ深イ極處マデ 綱ニテ結堅

下 床 (古語番繩之類謂之綱根) 古語ニハ後ノ世彼ト是ト番ノ處チ結合スル類

ノ處チサシテソレ 波府虫 能 禍無久 昆蟲即毒アル蛇 高天  
チ綱根トイヘリ

原 波 青雲 乃 靄 久 極 美 官ノ千木ノ聳タル天空ハ青雲即空 氣ノ蒼々ト立靡テ見ユル極處マデ

天之血垂 天之富足ノ義 飛鳥 乃 禍無久 空飛鳥ガ毒葉 ナル煙出ヨリ 毒物ナド落シ

入テ害チナ 掘堅 多 留 柱桁梁戸牖乃 錯比 (古語 ス災難ナク

云伎加比 此錯ノ字チ古語 動鳴事無 久 底之石マテ掘入 二伎加比ト訓ム

ト桁ヤ梁ヤ戸隔等ノ被レト是レト來交組合フ  
錯ノ處動キ鳴リヲギシギシトガダツク事ナク  
引結幣魯葛目能

緩比取葺計魯草乃噪岐(古語云蘇蘇岐)

此ノ噪ノ字ヲ古語無久○上ニモ綱根ト云ヘル如ク番繩ニテ結タ結目ノ  
二蘇蘇岐ト訓ム 緩ヤ御屋ヲウナ葺イタ萱ガソ、ケ亂レヲガサ

々々ソ、御床都比能佐夜伎夜女能伊須須

支伊豆都志支事無久○畫御座ノ大御床之邊ニ坐ス時御心  
ノ職カシキ事ヤ夜御殿ニ御寮坐テ

夢ニ侵サレ給アイソイソ驚平氣久安久奉護雷神御名  
給様ナイツ々々シキ事ナク

○蘇蘇云床都比の

比は海邊濱邊な

どの邊

○又云御床都比云

々は畫御座云々

夜女能云々は夜

御殿の事よて云

々

○後釋云伊豆都志

伎は御床都比と

夜女能云々二を

受て云ふ

乎白久○平カニ安カニ幸奉テ凶事ヲ忌避ツ 屋船久久遲命○

屋大禰莖之父之御事○ 是木靈也○ 屋船○  
豐宇氣姬命ノ幸靈ナリ 此ハ木靈ニ坐ス御名ノ義 屋船

豐宇氣姬命○ 是稻靈也○ 俗謂宇

賀能美多麻○ 此レハ稻穀ノ靈ニ坐ス今世間ニ此 今世産屋

以辟木束稻置於戸邊乃以米散屋中之

類也○ 今世産室へ兒物ヲ入レシトテ拆木ト束稻トヲ戸ノ邊ニ備へ置イテ  
又米ヲ屋内ニ蒔散ス風習ノアルモ豐宇氣姬命ハ本稻穀饌物ノ守神

○按に上の言齋鏡

白久の白久を此

前にて結ふへき

を詞を續け此處

に白久を重ねて

上のを結すて

り心をつけて見

るべし

○按に屋船豐宇氣

姫命は此處には

屋船草野姫命な

と申すへきを猶

本靈の御名に豐

宇氣姫と申し

るゆゑよしは史

傳まら講義等の

説あれど此處に

掲げかゝし略解

に就て見るべし

○上の御名乎白久  
を此處の御名乎  
波奉稱にて結ひ  
て直に氏にて下  
句へつ、けさり

○後釋云齋玉作の  
齋は作る人に係  
れる詞なり

ニテ家屋ノ護モ其幸靈タル木  
草ノ二靈ヲ兼テ給ヘル故ナリ  
御名乎波奉稱  
利氏○御名ナハ  
稱賛シ申

皇御孫命乃御世乎○天子様ノ  
御壽命ヲ堅磐常磐爾奉

護利○堅磐ノ如クニ常磐  
ノ如クニ護ヒ奉リ五十樞御世乃足良志御世

爾○茂大ノ御壽ノ  
充足ノ御命ニ田永能御世止奉福爾依○足長  
ノ御

壽命ト幸之齋玉作等我ガ○齋清マリ居ル玉  
造ノ氏人等ガ持齋波利持淨

奉ルニ依テ麻波利造仕禮留○殊更ニ齋マリ十分ニ清マ  
リテ製造仕テ貢進セシ瑞八尺瓊

能御吹伎乃五百都御統乃玉爾○ミツ々々ト美キ  
瑞彌真明瓊ノ御

祝壽ノ料ノ五百箇御統トアカレニギ  
フルゴトコイフ明和幣古語云爾伎氏和幣ニ  
字ナ古

音ニ爾伎ノ明ト色ノ美キ精細布照ト光澤  
ノ宜キ精密布ヲ附テ幣トシ隴和幣乎附氣氏○明ト色ノ美キ精細布照ト光澤  
ノ宜キ精密布ヲ附テ幣トシ齋

部宿禰某我弱肩爾太襪取懸氏○齋部宿禰名ハ  
某ガ屈伸自在

ニ連續セル柔肩ニ太手助ヲ取言壽枝ギ  
シツメマツルコト鎮奉事能漏落武

事乎波○奇護音ニ音祝テ大殿ヲ平安ニ鎮メ奉ル音ト神直日命

○姓氏錄云齋玉作  
高御魂命孫天明  
玉命之後也  
○臨時祭式云凡出  
雲國所進御宮岐  
玉六十連三時大  
慶祭料三十六連  
臨時二十四連每  
年十月以前令進  
字部神戶玉作氏  
遺傳差使進上

此の白は上に白  
久といひて其を  
結へるに非ず上  
に白久といふ詞  
二處あれど其は  
既に結ひ棄れ  
は此處にて更に  
結ふ例には非て  
れ別に一掃なり  
古語拾遺云爰令  
天手力雄神引啓  
其罪遷坐新殿云  
云令大宮賣神侍  
於御前是太玉命  
神如久志備生  
善言家詞和君

臣間令宸  
襟悅傳也  
按次の御門祭  
の文には参入罷  
出入名乎問所知  
とあるを此處に  
た、人能どのみ  
あるは文字の脱  
たるなり此處も  
同じく名乎の二  
字かとも思へど  
定かねたればま  
つ〇を記し置て  
解は大かた名乎  
とありけむと推  
量りて施せり

大直日命聞直志見直志氏  
神直靈之御事大直靈之御  
事ノ二神ノ凶事ヲ吉事ニ

取リ直シ給フ御恩靈ヲ以テ音ノ漏ラ  
平良氣久安良氣久所  
ンハ聞直シ專ノ落ンハ見直シテ

知食登白  
此ノ大殿祭ノ善言祭事ヲ平ラ  
ケク安ラケク知シ食セト白ス

詞別白久  
詞ヲ別  
大宮賣命登御名乎申事  
コトヲケテマサキク  
オホミヤノメノミコト  
ミナ  
マサス  
コトハ

大宮之女命ト此大殿祭  
皇御孫命乃同殿能裏爾塞  
ニ御名ヲ稱ヘ白ス故ハ  
スメ  
マノミコトノ  
オナワオホトノ  
ウチ  
サヤラ

坐氏  
御名ニモ大宮之女ト稱奉ル如ク天皇様ノ  
同御殿内ニ兇物防衛ノ爲メ塞在坐シテ  
マカリマカリツル  
ヒトノ

○選比所知志  
御所へ参入り御殿ヨリ罷出ル人々ノ性質行  
狀等ヲ撰ビ監視シ知シ食シ  
○此處人ヲ云

神等能伊須呂許比阿禮比坐乎言直志和志  
カミ  
タチ  
ノ  
イ  
ス  
ロ  
コ  
ヒ  
ア  
レ  
ヒ  
サ  
マ  
チ  
コ  
ト  
ナ  
ホ  
ゼ  
ヤ  
ハ  
シ

古語云夜波志  
和志二字ヲ古言  
坐氏  
崇神禰神ナドノ勇進  
ニ夜波志ト訓ム  
マシテ  
○崇神禰神ナドノ勇進  
ロコビ暴動ト坐シテ

善音美詞ト稱スヘキ音モテ直シス  
皇御孫命  
天子様ノ  
朝乃  
カシ和柔之坐シテ  
○此處神ヲ云  
スメ  
マノミコトノ  
コトノ  
ア  
シ  
タ  
ノ

御膳夕乃御膳供奉  
流  
朝ノ供御夕ノ供御  
比禮懸  
ケ  
ユ  
フ  
ベ  
ノ  
ミ  
ケ  
ツ  
カ  
ヘ  
マ  
ツ  
ル  
○朝ノ供御夕ノ供御  
ヲ調理シ仕マツル

伴緒襖懸伴緒  
平  
領巾ヲ掛テ供御ノ事ニ預奉ル采女ノ群ノ長  
手助掛テ御膳ノ事ニ供奉スル膳夫ノ群ノ長

○按に正朝に不令  
在をアラシメス  
と訓たれどいか  
とればゆれば  
訓を改めつ

○禮義云己乖々は  
善なり手履足履  
は過なり

手躓足躓ナノマカヒアシノマカヒ古語云麻我比ガヒト不令ナサレ

為氏スデ手ノ躓足ノ躓テノタドノノ不敬コトナク親王諸王諸臣百官人オホキミナオホキミナオホキミナモ、ノツカサノヒト

等ナド乎ナド皇族タル親王等王等大臣公卿オノガムキムキナラシメス己乖乖不令在オノガムキムキナラシメス分ノ心

心ノ向キ向キニシアソキコ、ロキナキコ、ロナ邪意穢心無オノガムキムキナラシメス久オノガムキムキナラシメス邪心穢心ト君朝廷ニ背キ  
奉テ不忠ニモ謀反ナト企

ツル様ナルミヤス、メ、ユス、メ、ミヤツトメ宮進米爾進宮勤爾勤ツレメ之米メ氏タ一向ニ宮  
即御所へ

ノミ進マセニ令進只管ニ朝廷トガアヤマナアラム答過在トガアヤマナアラム乎波見直志聞直  
即宮へノミ勤メニ勤メサセテ

坐マ氏タ○若レ戒メテモ慎ミテモ自然ニ咎ヲ犯シ過ヲ爲ス事ノ有ア平良氣ヒラキ

久安良氣キウヤスラキ久令仕奉坐爾依キウツカヘマツラシメマヌ氏タ○朝廷へ平ラケク安ラケ  
ク仕ウマツラセ下サレ

大宮賣命オホミヤノメノミコト止御名乎トメミナナ稱辭竟奉久登白ナヅケテマツラシメマヌ

大宮之女之御事ト其御功德  
ノ御名ヲ稱賛シ奉ルト白ス

○御門祭ミカドマツリ  
大殿祭ニ附キテ  
ノ御門神ノ祭

櫛磬牖豐磬牖命登御名乎申事シノイハマトトモイハマトノミコト、ミナ波ハ○奇岩真門之  
御事豐岩真

○禮義云祝詞式  
此詞をかく別條  
の如く記された  
れども其式は大  
殿祭に據て共に  
行はる、事よて  
眞には其詞別の  
如くなるも、也  
○古語拾遺云、于  
時天照大神、云

云愛令天手力雄  
神引啓其扉、遷  
坐新殿則天兒屋  
命太玉命、以日  
御綱、廻懸其殿、  
云々豐饗間戶命、  
榊齋間命二神、  
守衛殿門  
此處の氏もじは  
次の敷句を隔て  
て自上往波云々  
の句の處へかけ  
て見るへし

門之御事ト御名ヲ稱ヘテ此  
大殿祭ニ稱賛シ奉ル故ハ  
四方内外御門  
爾○御所ノ四方ノ内  
重外重ノ御門ニ

如湯津磐村久塞坐  
氏○五百箇ト多クノ磐群ノ堅固ナ  
ル如ク防衛ノ爲ニ塞在坐シテ  
四

方四角 與利 疏 備荒 備來 武天 能麻 我都 比

登云神 乃言 武惡事 爾(古語云麻我許登)

惡事二字ヲ古音ニ  
麻我許登ト訓ム  
相麻自許利相口會賜事無 久○

東西南北ノ四面ハ勿論東北東南西南西北等ノ四隅ヨリ御門モ經ズシテ疏ト  
暴ト來ントスル天之禍之靈ト音フ禍神ガ音誘ス禍惡音ニ相交結相口令合結

フ事ナク ○會ハアハセナ  
リヘノ假名ニ心ヲ附メシ  
自上往 波 上護 利 自下往

波 下護 利 ○禍神ガ御門ノ上ノ虚空カラ通行ハ上ヲ守リテ入ラシメ  
ズ御門ノ下ノ地中ヨリ往來ハ下ヲ守リテ入ラシメズ

待防掃却言排坐 氏○若モ來ナバト待設ケテ來レハ直ニ排  
ヒ遣リ言ニ音伏セ退之ツ、坐シテ

朝 波 開門 夕 波 閉門 氏○朝ニハ天子ノ御爲メニ御門ヲ  
開キ夕ニハ御門ヲ閉テ、○

此レハ其官アリテスル事ナ  
レモ守護ノ上ニ就テ云リ  
參入罷出人名乎問所知志

參入退出ノ諸人ノ姓名ハ勿論其行狀  
心中マデノ事ヲ問糺シ知シ看シテ  
答過在 乎 波 ○御所奉仕ノ人  
ノ身ノ上ニ若

○按大股祭の三篇之本注多く本文處々にて断れられたれば初學の人は熱く讀度し難かるべし故先(の印せる注文の處々を除きて本文を讀つて後)に本注を讀ひへし然せされは文章の脈勢を覺り難かるへし

○神祇令云凡六月十二月晦日大祓除不祥也東西

文部上三祓刀云云  
云訖百官男女衆集祓處、中臣宣祓詞、卜部爲解除、  
○太政官式云凡六月十二月晦日於宮城南路、大祓、大臣以下五位以上、就朱堂門、辨史各一人率中務式部兵部等省中見參人數百官男女悉合祓之、隨時大祓亦同、  
○後釋云天皇朝廷爾と云より一段と文殊に古くいといとめでたしこれ上代も百官の大祓の時加へ

モ咎ヲ過テ神直備大直備爾  
神直靈大直靈ノ神ノ見直  
凶ヲ吉ニ直ス如クニ

聞直坐 氏  
見ニル事ハ見直シ聞ユ  
平良氣久安良氣久

令奉仕賜故爾  
平ラケク安ラケク不調法ナク  
仕マツラセ下サルガ故ニ  
豐磐瀾

命櫛磐瀾命 登御名乎稱辭竟奉 久登白

豐岩真門之御事奇岩真門之御事ト其御功德ノ顯ハレタル美名ヲ稱へ申ス頌辭ヲ竟へ究ハシ奉ルト白ス

○六月晦日大祓  
六月晦日大祓廣ク朝廷ヲ始  
天下中ノ罪穢ヲ拂フ祓ノ詞  
十二

月准之  
十二月晦日大祓式ノ詞モ之レニ准フ

集侍親王諸王諸臣百官人等諸聞食

止宣  
ウコメキ並ビ在ル親王等王等臣等百官諸司ノ人々女官等ニ至ル迄ノ諸人聞取ラレヨト先ツ一書申渡シ宣リ聞カス  
○古文ニハ此條

ハナカリシナ後ニ加ヘン  
物ナル事後釋ニ云ヘリ

天皇朝廷爾仕奉 留  
天皇之朝廷ニ奉仕スル  
比禮挂伴男  
領巾

テ御膳ニ給仕ス  
手極挂伴男  
手助ヲ掛テ供御ヲ調  
進スル部長即膳夫  
執負伴

て宜りし詞なる  
へし云々  
○後釋云四の伴長  
を擧たるは多く  
の中に少か摘  
出て云古文の例  
にて是に諸の伴  
長をこめたり次  
文にて知るべし  
○同書云犯とは慎  
みてすまじき事  
を慎ます等閑に  
大らかにするを  
云てればかそ也  
○釋解云今按ふ字  
鏡に憐情也乎加  
志とあれば於の  
假名には非ずさ  
ればねはわすの  
意とは爲難し  
○今按に此二説何

れ當れりや定め  
かねたれば此處  
のみ犯字を字の  
まゝに出しつ  
○後釋云高天原  
と云より下の祓  
詞は諸國の大祓  
の祝詞なるを朝  
廷百官の大祓に  
も兼用られたる  
ものあり

**男劔佩伴男** ○劔ヲ負ヒ弓ヲ執テ守衛ニ仕フル部長劔ヲ佩テ誓固ニ仕フル部長即六府武官ノ類

**乃八十伴男** 乎始氏 ○其外部長ト云フ部類長ノ八十ト數多ノ伴長即百官ヲ始トシテ

**官爾仕奉留人等** 乃 ○官省寮司等ノ諸役所諸官員ノ附屬ニテ奉公スル諸人等ガ

**犯家牟雜雜罪** 乎 ○心ノ外ニ過テ犯シタリケン種々様々ノ罪事ヲ

**晦之大祓** 爾 ○今年六月ノ月隱ノ義ナ

**諸聞食止宣** 乎 ○朝廷ヨリ祓ヘナサレ清メナサル事ヲ

**伴男**

**官**

**過**

**今年六月**

**祓給比清給事**

衆之諸之ノ人能ク聞シ看シ心得ラレヨト宣リ

聞カ

**高天原** 爾 **神留坐** 皇親神漏岐  
○天上高天原ノ神界ニ神鎮坐マス

**神漏美乃命** 以氏 ○天皇之親族トオハシマス神之男君神

**百万神等** 乎 ○八百方ト至極多數ノ天之神方ヲ

**神議議賜** 氏 ○神ト長クモ尊キ神様ヨリ神

**皇御孫之命** 豐葦原乃水穗  
○我が皇孫タル皇御眞



○依志のサハハセ  
の延言

○國中のヌハニウ  
の約言

○問志のハハハ  
の延言

○後神云神靈云々  
は竟神に保り  
神問云々はひね  
と大穴持神は保  
れり云々

國乎○豊ト稱美スル大日本ノ古稱葦原ヨ  
リ固成シ美稻ノ生スル瑞穂國ナ  
安國止平久知所

食止事依志奉  
○靜謐無事ナル安國ト平安ニ領知シ政治シ  
テ知シ食セト其事ヲ皇孫尊ヘ委任奉リ遊

如此依志奉  
國中爾荒振神等乎波

神問志爾問志賜神掃  
○斯様ニ委任奉ツタ國中ニ住ミテ  
暴動ビ立テ居ル兇惡ノ神等ヲバ

掃賜比氏  
○御勅使ヲ以テ大穴持神ニハ神ト尊ク御降ルニ問ルシ遊  
ハシ邪神ヲバ神ト長ク掃除ニ遣テ御退治遊ハシテ

語問志磐根樹立草之垣葉乎毛語止氏

邪神ノ暴ビニ感セラレテサカシゲニ言語シタ岩石  
木ノ切株草ノ片葉等ノ波及ノ兇物迄ヲ令言止テ  
天之磐座放○天之

即高御座ヲ高天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別  
天原ヨリ令離

氏○御天降ノ天路ニ霏ク天之彌重雲ト重ルル雲  
ヲ稜威ト長キ御神威ヲ以テ道排ニ道排テ  
天降依志奉支○

皇天二祖ノ神様ガ皇孫ヲ天降  
如此久依左志奉志四方  
シ此國ヲ皇孫ニ寄附給ケリ

之國中登  
○斯様ニ寄セ奉ツタ皇國ノ東  
大倭日高見之  
西南北四方ノ國ノ中央トテ

國乎安國止定奉氏  
○大ト美稱スル大川ノ廣々トウナ開ケ  
テ山遠キ故ニ日ガ空ニ高ク見ユル國

○按ヨ磐座放ハ皇  
御孫命ヲ磐座よ  
リ離ラシ意ニ  
わらで磐座を高  
天原より放ちの  
義なるべしそは  
大股祭の詞に皇  
我宇都御子皇御  
孫之命此乃天津  
高御座爾坐天  
津日嗣云々所知  
食止言寄奉賜比  
氏とある此乃ま  
た坐座てふ詞よ  
ても知られたり  
○考云これよりは  
神武天皇このか  
たの御代を申せ  
り下れ條々もし  
かり  
○日高見の解後釋

に依れり

ナ是レソ安國ノ美國オホキヨコ下津磐根ミヤハシラフトシキ爾宮柱太敷立オホキヨコノ下之

石ニ届ク程ニ掘入レテ宮柱ヲ太ク立テ○其柱ノ太カ如ク太知領高天原タカマノハラ爾千木高知チキタカチ氏○

高天原即天之眞空ニ樽風ヲ擧テ皇御孫之命乃美頭ミツツ乃

御舍仕奉ミアラカツカヘマツリテ氏○天子様ノ瑞ト清潔美麗ヲ御在所即御天之御

蔭日之御蔭止隱坐カゲヒノノミカゲトカシマシ氏○其御殿ヲ天子様ガ天ヲ蔽フ眞蔭

安國止平氣久所知食武國中爾成ヤスシクニトホシラケクシロシメサムクシスチナリ

出武天之益人等イデムアメノマスヒトヲ我○安國ト平安ニ何時マデモ知シ食レ領治

生リ出シ天之益人即天神造化ノ恩德過犯家牟雜雜罪事アヤマナオカケムシキザンツキコトハ

天津罪止アマツツミト畔放ハナチナツメ溝埋ホハナチ樋放ヒハナチ

頻蒔レキマキ串刺ケンサシ生剝逆剝尿戸イケハキサカハギクツヘ許許太久ヨコヨコトク乃罪ノツミ

乎天津罪止ナアマツツミト法別ホノリツケ氣氏ケシア○高天原ニテ紫莖鳥尊ヨリ起シ天之罪

シ溝ヲ埋テ水路ヲ斷樋ヲ放テ港水ヲ無用ニ洩シ種ヲ二度蒔シ田底ニ串サレ

後釋云諸の罪條の中に自ある穢又自ある災なども有る過犯とは云可らざるも似たれどもこは然委く事を分て云べき所にも非れば姑過犯の罪に附ても云べく云々  
○傳云拾遺と逆刺生駒とある如く生てある駒の皮を逆さまに刺ながら其任よ生せ置て苦しむるを云なり  
○古事記云於閑食大嘗殿屎麻利散

後釋云閉は閉理の理を省ける言也云々

略解云今按此處相配といふ物み白人は白禿白癩古久美は癩腫之類と云へり

後釋云上なるは光母に娶へるは犯す非ずして後其子にも速ねて好くるが犯なり下なるは先子みあへるは犯す非ずして後其母も好くるが犯なり云々

罪名ヲ宣リ 國津罪 止ハ八〇國之罪即國人ノ 生膚斷死膚

斷白人胡久美 〇生々膚ニ疵ヲ附ケ死々膚ニ疵ヲ附ル穢ノ 罪白癩白子ノ類瘡附贅懸疣ノ類ノ穢キ罪 己

母犯罪已子犯罪 〇己カ生母ヲ犯シタル罪已 母與子

犯罪 〇先ツ人ノ母タル女ニ娶テ 子與母犯罪 〇先人ノ子タル 女ニ娶テ次ニ

其母ヲモ 畜犯罪 〇飼物即馬牛等ノ家 昆虫乃災 〇這蟻即蛇 蜂百足等 犯セル罪 畜類犯シタル罪

ノ災 高津神乃災 〇高即空ヲ飛アリク 高津鳥災 〇高即空 飛テ

惟鳥ノ災 畜仆志 蠱物爲罪 〇牛馬等ヲ俄ニ死ス畜令斃ノ術ヲ 害ノ罪 施シ人ヲ咒咀蠱術ヲ施セル罪 許

許太久乃罪出 武 〇國民ノ犯罪ヲ探求メハ許 如此出波 〇

斯様ニ犯罪 天津宮事以 氏 〇高天原ノ天之宮ニ始リシ 大中

臣 〇神事係ノ大 天津金木 乎本打切末打斷 氏 〇天之 中之臣ガ

ナ本ヲ打切リ末ヲ打斷テ其中間ヲ以テ破 千座置座爾置足 波 之物ヲ居置ク臺即座置テ造テ 〇其上ニ

志 氏 〇千座ト數多キ置座ニ 天津菅曾 乎本刈斷末刈 破之物ヲ置足ハセテ

後釋云文選東方朔が文以以爲蠱蠱とある注み能ハ小木枝也と云へり云々

○天降の解は後々  
神の説は據れり  
次の地之祓は天  
之神と相會云々  
の解もしかり

切氏。八針爾取辟○天之管其緒即緒ニ割テ用ル天之管ヲ本ヲ  
刈斷末ヲ刈切テ中程ノ佳キ處ヲ彌針ト幾

針ニモ取割イテ其緒ニ爲○身ノ罪穢ヲ打拂テ天津祝詞乃太祝詞事乎宣

禮○天之醇辭ノ太醇辭ト甚モ尊如此久乃良○斯様ニ大中臣  
ガ祝詞ヲ宣ハ

天津神○天之天磐門乎押披○天之國ノ磐ト堅固  
ナ官殿ノ御門ヲ押

天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別○天路ニ雲ク彌重雲ヲ稜威ト長キ御勢ニ道排ニ道排ト押分  
ツ高山短山ノ峯ナドニ天降坐テ其醇辭ト式トテ聞看サ

所聞食○天路ニ雲ク彌重雲ヲ稜威ト長キ御勢ニ道排ニ道排ト押分  
ツ高山短山ノ峯ナドニ天降坐テ其醇辭ト式トテ聞看サ

國津神○地之祓ハ高山之末短山之末爾上殊更ニ

坐○高山ノ峯ヤ短山ノ峯ニ登リ集高山之伊穗理短山○聞給フ御耳視給フ御

之伊穗理乎撥別○聞給フ御耳視給フ御所聞食○聞給フ御耳視給フ御

如此所聞食○斯様ニ天神氏○斯様ニ天神

皇御孫之命乃朝廷乎始○上ハ皇御孫氏○上ハ皇御孫

天下四方國爾○下ハ天下中四罪止云○下ハ天下中四

此止もじは下の  
 遺棄 不在止の  
 止と共ハ被給  
 清給事乎の句へ  
 かる  
 神代記云我所生  
 之國唯有利壽而  
 養福之積乃吹撥  
 之氣化為神号曰  
 級長戸邊神亦曰  
 級長津彦命是風  
 神也  
 讀義云科は息長  
 云々神名の志那  
 都比古神また級  
 長戸邊命の都も  
 戸も共ハ處の積  
 なるへく覺えた  
 り云々此科戸  
 と云るは級長處  
 なるが云々級長

戸の風のと云れ  
 戸風の名ハ非ず  
 風となるべき氣  
 を級長と云ひ其  
 迫りて助さ進む  
 をなむ風とは云  
 るなるべき云々  
 万葉集云夜伎多  
 知遠刀奈美乃勢  
 伎  
 按此處の警諭  
 四つははなつと  
 はらふとを以て  
 互ハ對せり

罪 被 不在 止  
○罪ト名ツケ云ベキ限リノ罪  
 穢ハ皆消失テ殘ハ不有ト  
 科 戸 之 風 乃

天 之 八 重 雲 乎 吹 放 事 之 如 久  
○息長處ニ吹立ツ風  
 ガ天空ノ彌重雲チ

離 離 離 離 吹 放 事 之 如 久  
○吹放テ遂ニハ消失シムル  
 事ノヤウニ○罪穢ヲ被去ル譬ノ一  
 朝 之 御 霧 夕 之 御 霧 乎

朝 風 夕 風 乃 吹 掃 事 之 如 久  
○朝立ツ眞霧夕立ツ眞霧  
 ナ朝風夕風ガ殘ナク吹

拂 拂 拂 拂 消 失 シ ム ル 事 ノ ヤ ウ  
○罪穢ヲ被去ル譬ノ二  
 大 津 邊 爾 居 大 船 乎 舳 解 放

舳 解 放 氏 大 海 原 爾 押 放 事 之 如 久  
○大津邊即廣  
 イ船着所ニ

泊 居 爾 大 船 舳 解 放 舳 解 放 シ テ 渺 々 タ ル 大 海  
ニ押シ出シ其津ヲ離ツ事ノヤウニ○罪穢ヲ被去ル譬ノ三  
 彼 方 之 繁

木 本 乎 燒 鎌 乃 敏 鎌 以 氏 打 掃 事 之 如 久  
○彼  
 方

ト 見 波 ス 所 ノ 繁 木 之 本 即 繁 立 テ ル 細 木 ヲ 刃 ヲ 燒 タ ル 錄 ノ 敏 鎌  
ナ以テウナ拂ヒ刈リ棄ル事ノヤウニ○罪穢ヲ被去ル譬ノ四  
 遺 罪 波

不 在 止  
○一トシテ殘リ留  
 ル罪ハ不有ト  
 被 給 比 清 給 事 乎  
○朝廷ニテ被  
 之タマヒ清

高 山 之 末 短 山 之 末 與 里  
○天神地祇ノ此事ヲ聞  
 召シタル高山之峯短

山 之 峯 佐 久 那 太 理 爾 落 多 支 都 速 川 能 瀨 坐  
ヨリ

後釋云瀨織は瀨下にて彼伊邪那岐神の於中瀨織迦豆伎給ふと古事記に於る意の御名也倭姫命世記云荒祭宮一座皇大神荒魂伊奘那伎大神所生神名八十柱津日神也一名瀨織津比咩神是也とあり云々

同云ここの御禊段又生坐る伊豆能賣神なり云々即速秋津日子速秋津日女と同神なり秋之明の假字にて明之御禊に由りて消まりたる由の御名

同云倭姫命世記に多賀宮一座豐受大神荒魂也伊邪那岐神所生神名伊吹戸主神亦名神直日大直日神と見えたり多賀宮は伊勢外宮別宮なり是を豐受の荒魂と云るは心得ぬと氣吹戸主神と直毘神なりと云るは古き傳説なるべし此處に正しく叶ひていふ身し

要解云今按に御鏡座傳記に伊奘諾尊到於素日向小戸橋之權原而設除之時云々亦

須ス○オノチナガリ真曲垂イハヒ下岩間谷合ナドナ過テ水勢セ瀨織津比咩ヒメ止云神トイフカミ

烈ク落激ツ急流川ノ端ニ坐マス

大海原オホウナハラ爾ニ持出モナイア奈武ナム○瀨下之靈女ト云神第一番ニ祓之物ニ添テ流シタル罪穢ヲ受取テ速川ノ水

ト共ニ大海原ニカ如此持出往モナイア波バ○斯様ニ持出シアラ荒鹽之鹽ワサ持出シ去ナン

乃八百道ノヤホヤ乃八鹽道之鹽ノヤホヤ乃八百會爾座須ノヤホヤ

速開都比咩ハヤアキツヒメ止云神トイフカミ○荒潮ノ潮ノ彼方ノ潮道此方ノ潮道ノ八百ト數多キ潮道ノ瀨織道ガ八百會

ト一處ニ集リテ海底へ卷入ルモナ持可カ可吞カ氏ム○第二番ニ其罪穢處ニ坐ス勇明之靈女ト云神シテ受取テカツカ

ト音立テ口中カ如此可吞カ氏ム○斯様ニカ、氣吹戸坐須イニ吞込テ

氣吹戸主イ止云神トイフカミ○息吹處ニ坐マス息吹處主トチ根國底クニソコ

之國爾氣吹放ノクニニ氏ム○第三番ニ其罪穢ヲ受取テ罪穢ノ生ズル如カ本タル根之國底之國ニ氣吹放之テ

此久氣吹放チ氏ム○斯様ニ氣吹放テ罪穢チ根國底之國爾クニソコ

坐速佐須良此咩マス登ト云神イ○根國底國即黃泉ノ國ニ坐マス勇流離靈女ト云神即速素

靈ノ神ガイ持佐須良此咩チ氏ム○第四番ノ結局ニ其罪穢ヲ受取テ持伶傳ツ、何處ト無失ナン

洗鼻因以生神也  
 速佐須真比賣神  
 與兼或嶋尊台力  
 坐給也どわり執  
 中抄引る伊勢  
 國尾崎神社比  
 素盞鳴尊御子也  
 とわれど此は御  
 子に非ず別魂と  
 聞えたり云々  
 ○同云今接るに新  
 庄道雄の大祓器  
 解といふものに  
 天武紀に大祓用  
 物云々祓柱馬一  
 匹云々三代格に  
 大祓料物云々馬  
 一匹云々と見え  
 たれば馬も祓物  
 に出す事なれど  
 も外物と同一千  
 座置座置物な

如此久矣ウシナヒトナラハ氏波ハ○斯様ニ行方モナス天皇我ガ朝廷爾仕奉ル

官官人等ツカサツカサノヒトトモナハシメテ乎始ハ氏ノ○天皇之朝廷ニ仕奉ル百官アモノシタ天下四方モ

爾波ハ○天下四方ノケツ自今日始ハ氏ノ○此大祓式執行ノツミ罪止云布罪ツ

波不在ハ止ト○罪ト云フベキ罪穢ノツ高天原爾耳振立聞ハ

物止ト○高天原ト高ク耳ヲ振リ立テ、物ノ音ヲ聞物ヲウマヒキダテ馬牽立テ氏ノ

被處へ馬ヲ牽ヒ今年六月晦日コト○今年ノ六月ノユラ夕日之降ヒ

乃大祓オホハツ爾ハ夕日之降ノ時即ハ祓給比清給事乎諸聞コト

食止宣メセト○朝廷ヨリ祓給清給フ御事ヲ此處ニ集ヘルシ四國卜部シ

等大川道爾持退出イモ氏祓却止宣ノ○伊豆壹夜對馬ニ

リ神祇官ニ仕奉ル卜部等祓柱ヲ大川道即罪ヲ流シ遣ル

○東文忌寸部獻横刀時呪ヤマトノフミノイミ皇居アル東方即大和國ナル

祓式ノ横刀ヲ奉カ西文部准此レ皇居ヨリ西方即河内史部ヨリル

らねば取別て愛  
 に引立る事を云  
 るにや有む云々  
 ○按に三國の外今  
 一國を後釋は  
 京といひ史傳に  
 は常陸といひ釋  
 解に引ける龜相  
 記には對馬の上  
 下二縣を分て各  
 一國とすと云り  
 ○神祇令云凡六月  
 十二月晦日大祓  
 東西文部東直西漢西文  
 文直漢上祓刀漢  
 祓詞謂漢文部漢  
 祓音所漢讀者  
 也  
 ○學令云東西史部  
 云々漢解云爾居  
 右漢故曰漢東西  
 也、前代以來奕  
 世繼業爲漢史  
 官、或爲漢博士因  
 以明漢姓也、  
 爾之史也、

此文ひよぶるの  
漢文にて神名も  
皆漢國に稱され  
なかに引けるを  
略抄して次々に  
并べ奉べし○史  
記天官書云○中  
宮天極星其一  
之明者太一帝居  
正極云○天一  
帝旁三星三公  
之別名○同正義  
云○三公三星云  
云○為太時司徒  
司空之象主三機  
運陰陽○左三機  
務○書洪範云  
五紀四曰星辰  
傳云廿八宿迭見  
以叙節氣○星  
經云司命司籍司  
危司非各二星  
云々右各主三天  
下壽命爵祿安泰  
危敗是非之事  
天官書云四曰司  
命六曰司籍索隱  
云司籍賞功進  
士河○命主災  
○老君中經云東  
王父者青陽之氣  
也云々在蓬萊山

謹請  
○謹ミ畏テ次々ニ舉タル皇天上帝ヨリ四時四氣迄ノ神  
靈等ニ請祈ル○此請字ハ四時四氣ノ句ヨリ還ル也  
皇天上

帝  
○天上ノ主宰タル皇天トモ上  
帝トモ尊稱スル太一ノ靈  
三極大君  
○大尉司徒司空ノ三  
公ノ象タル三台星  
日

月星辰  
○宇宙ヲ照ラス日ト月ト送コ見レ  
テ氣節ヲ叙ゾル二十八宿ノ星辰  
八方諸神  
○乾兌離震  
巽坎艮坤

司命司籍  
○天下ノ壽命ヤ災害ヲ主リ爵祿ヲ以テ  
功ヲ賞シ士ヲ進ムル事ヲ主ルトイフ  
ニ有リトアル群神

左東王父 右西王母  
○左即テ東方ヲ治ル神靈ハ青陽之  
氣也ト云フ東王父右即テ西方ヲ  
治ル神靈ハ太陰之  
氣也ト云フ西王母

五方五帝 四時四氣  
○中宮太帝東宮蒼帝  
西宮白帝南宮炎帝  
北宮玄帝ノ五帝春夏秋冬ノ四時  
ノ氣候ヲ司ルトイフ諸星ノ靈

捧以銀人請除禍災  
○銀塗ノ  
人像ヲ捧ルナレト次句ニ金字有ル故省ル也  
捧以金刀請延帝  
○金塗ノ  
人像ヲ捧ルナレト次句ニ金字有ル故省ル也

祝曰  
○別  
祝曰  
○別

東至扶桑  
○東ハ扶桑即皇國ヲ漢土ヨリ  
稱シテ東方遠界ニ至ル迄  
西至虞淵  
○西ハ扶桑即皇國ヲ漢土ヨリ  
稱シテ西方遠界ニ至ル迄

南至炎光  
○南方ハ炎光ト  
稱スル極所迄  
北至弱水  
○北方ハ弱水ト稱ス  
ル隔地ニ至ルマデ

千城百國 精治  
○天下ノ千城百國何處モ  
何處モ能ク治マリテ

萬

十州記云扶桑地  
地方万里上  
太帝宮太真東王  
父所治之處也  
○老君中經云  
西王母者大陰之  
氣也治崑崙之  
金城○星經云  
五帝內座在華  
蓋下○漢帝座  
也  
四時祭式云金  
銀塗人像各二  
枚已上東西文部  
所預  
十州記云扶桑地  
地方万里上○濠  
州子云日薄於  
虞淵是謂三黃昏  
文撰與都賦云虞  
淵日所入也○十  
州記云崑崙州在  
南海中○有火林  
山○山中有火光  
獸云々○書禹  
貢云嶺南弱水  
後漢書東夷傳云  
夫餘國北有弱  
水之中記云天  
下之弱水○鴻毛  
舟之弱水○鴻毛



不能觀之十  
州記云崑崙云々  
在西海之戌地  
北海之亥地地  
方一万里有弱  
水

神祇令云季夏鎮  
火祭 鎮解云開宮  
火祭 城四方外角  
ト都等鎮火而  
祭之爲防火災  
故曰  
鎮火  
同云季冬鎮火祭  
此氏もは天下  
所寄奉志の句へ  
かゝる

歲万歳万歳 ○万歳マデ平安ナレ万年  
モ安穩ナレト祈リ祝ス

○鎮火祭 大裏ノ外廡ノ四角ニ於テ六月晦日ト十二月晦  
日ニ火ヲ鎮リ改テ火災ヲ鎮メ過レ所ノ祭事

高天原爾神留坐皇親神漏義神漏美能命

持氏 ○天上高天ノ原ニ神ト鎮テ御出遊ハス天皇之親  
神之男君神之女君即皇天二祖ノ御命令ヲ以テ 皇御孫命 波

皇御真之尊即天皇 豐葦原 乃 水穗國 乎 ○豐ト美稱スベキ葦原  
孫邇々藝尊様ハ 之瑞穂國即十國土成

立ノ初メ葦ノ多ク生タル原ナリレ故葦原ト稱ヒ稻穂ノ瑞トヤスレト  
美レク宜ク出來ル國ナル故瑞穂ノ國ト稱フ大日本ノ國ナ 安國 止

平久知所食 止 ○無事靜謐ノ安國ト平カニ知レ看レ御  
治メナサレト仰セラレテ○以上詔命 天下所

寄奉志 時爾事寄奉志 ○此ノ天下ヲ皇御孫尊ニ寄附シ奉リ  
ナサレレ時ニ二祖ノ御音ヲ以テ副

奉ツタ 天都詞太詞事 乎 以氏申久 ○天之祝詞ノ太ト尊  
キ祝詞語ヲ以テソ

神伊佐奈伎伊佐奈美乃命 妹背

二柱嫁繼給 氏 ○脚ト奇麗ニ尊ク長キ伊邪那岐伊邪那  
美命様ノ夫婦ニ神嫁台遊ハサレテ 國 乃

八十國島 能 八十島 乎 生給 比 ○大數タイハム八十  
ト稱スベキ數多ノ

○按シ神伊佐奈伎  
云々トリ事教悟  
給支文でレ一段  
即太祝詞なり  
○神祇云古事記に  
美斗能麻呂波比  
とわり美斗は御  
處以て其下に久  
美度爾爲異而生  
子とある久美度  
は隱處にて夫婦  
隠り居る身屋と  
云ふよて此ニツ

我々彼八萬殿の  
用を云るなれば  
縁繼の斗もとを  
云る事著ければ  
就處の義なる事  
いふもさなり  
○方丈集七云人在  
者母之最愛子言  
云々  
○史傳云火は萬物  
を産成す徳ある  
物なる故に此神  
を火産靈神とは  
申す事也

○按に伊佐奈伎命  
は女神の御陰を  
焼れ給ひし事を  
此時始て知看し  
、なり然ば上の  
美保止被燒氏は  
地の嗣にて伊佐  
奈美命の御身に  
つけていひ此處  
の御保止乎所燒  
坐支之伊佐奈伎  
命の御上にかゝ  
りくいへるあり  
○傳義云わはさす  
は剛しく不意よ  
り出て人を盡す  
意にてそれ阿波  
とアハノ惡ムな

國々鳴々ナ生  
出シ遊バサレ  
八百万神等  
乎生給比氏  
○大數ヲ以テ稱ハ  
八百萬トイフ

ヘキ多クノ神々等ヲ  
御生ニ遊バサレテ  
麻奈弟子爾  
火結神生給  
氏○最末  
弟子

ニ火結神即火神ヲ  
御生ニ遊バサレテ  
美保止被燒氏  
石隱坐  
氏○御陰ヲ燒レ  
テ石室ノ中

ニ閉隠リ遊  
夜七夜晝七日吾  
乎奈見給比曾吾  
バサレテ

奈妹乃命止申給  
支○夜數ハ七夜日數ハ七日ノ間我身ヲ御覽  
下サレテ吾之汝夫ノ命様ニト伊佐奈伎

命へ御約束ヲ申シ給ヒケリ○夜七夜云々  
ヨリ奈妹乃命マア伊佐奈美命ノ御嗣ナリ  
此七日爾彼不足氏○

此ノ御約束ノ七夜七日ト云  
日數ニハ未ダ足ラズシテ  
隱坐事奇止氏見所行  
須

時○伊佐那伎命様ガ伊佐奈美命様ノ常ニ替ツテ斯ヤウニ隠リ籠リ坐  
ス事ハ奇怪イ事ヤトテ遂ニ其隠リ坐セル石室内ヲ御覽ズル時ニ  
火

乎生給氏御保止乎所燒坐支  
○前ニ火結神即火ヲ  
御生ナサレシニ因

ア御陰ヲ燒レテ  
御出ナサレケリ  
如是時爾  
○斯ヤウニ御覽  
ナサレタ時ニ  
吾名妹乃命能○

吾之汝夫之御事即  
伊佐奈伎命様ガ  
吾乎見給  
布奈止申乎吾乎見阿

波多志給  
止比津申給  
氏○我ヲ御覽下サルナト申上テ置テ  
ノニ其約束ヲ用給ハズ我ヲ御覽

その阿波にて物  
の見劣りするや  
うの言也云々  
○今按に阿波は淡  
海をアハとい  
ふ類の阿波にて  
海を用ひず物を  
輕し侮る意多志  
とハヤシ、ヒカ  
シ、ミダシ、ワカ  
シなどの多志に  
て佐行四段の活  
語なるべし

○按に生子と正訓  
にニコウミタマ  
フと訓めれどマ  
マハシと訓む方  
古例に合へり  
○神代紀一書云伊  
弉冉尊生火産靈  
時爲子所無而神  
退矣其且神退之  
時即生水神罔象  
女及土神埴山姫  
又生天吉爲  
考云川菜は和名

シ輕し侮リナサレタ事ヨト御申ナサ  
レテ○此ハ伊佐奈美命ノ御怒言ナリ 吾名妖能命被上津國

乎所知食倍志吾被下津國乎所知 牟止白氏○

吾汝夫尊ハ黄泉ヨリ指セバ上之國ナル此ノ願國ナ是迄通りニ領知メヌメン  
我ハ此國ヨリ指セバ下之國ナル黄泉國ヲ所治ント御申シナサレテ○此ハ伊

佐奈美命男神ノ垣間見ヲ耻給ヒテ今ハ男神ト一國ニ相住テ御面  
ヲ合ハセ奉リ難レ黄泉國ニ別レ去ラントテ申シ置給フ御鬮ナリ 石隠

給 氏○更ニ石構ノ内ニ奥 與美津枚坂 爾至坐 氏所  
深ク隠レ遊バシテ

思食 久○此國ト黄泉トノ界ナル黄泉之平易坂ト云坂 吾名妖能命  
路ノ處ニ至リ坐テ御心ツカレテ思レ召ヌハ

能所知食上津國 爾心惡子乎生置 氏來 奴

止 宣 氏○吾汝夫尊ノ所知食上之國ニ御穰威銳ク健ク剛クア神性ノ畏ロ  
シキ子即火神ヲ生ミテ其マヽニサレ置イテ來タ事ヨト宣給ヒ

仲セラ 返坐 氏○更生 子○平坂ヨリ引返シ御還リ遊バ 水神  
レテ シテ更ニ又御子ヲ生ミ給フ

菟川菜埴山姫四種物 乎生給 氏○水神罔象女神水ヲ  
汲ム料ノ菟即大吉

葛水ヲ能ク含物ナル水苔土神埴山姫神此ノ四種ノ物即 此能 心惡子  
神ハ二神物ハ水埴菟河苔ノ四物ヲ御生アソバサレテ

乃 心 荒 波 比 曾○此ノ健ク長ク心惡キ子ノ心ノ暴動ヒ 水 神 菟  
出テハ○講義云曾ハ爲ノ義ナリ云々

鈔に水苔一名河  
苔和名加波奈と  
云り今も水苔と  
いふ物ありて水  
を能く含む物故  
植木の根を此苔  
して纏ひて遠所  
にやるあり云々  
植山姫は凡ての  
土なりす植生を  
たもつ神みて壁  
塗籠して火を備  
る方也云々

此波もじ次々の  
氏もじ二にか、  
れり

埴山姫川菜乎持氏鎮奉禮止事教悟給支○

水神ハ水ヲ汲ムベキ匏埴山姫ハ水ヲ含メル川菜ヲ執持テ火神ノ荒ビテ鎮メ  
止メ奉レト其ノ行事ヲ伊邪那美命ヨリ水土ノ二神ヘ教ヘ諭シ教ヘ授ケ給ヒ

依此氏稱辭竟奉者 ○此御故事ニ因リテ鎮火祭ヲ執  
行シ稱辭ヲ竟盡シ奉タナラバ 皇

御孫能朝廷爾御心一速比給止波志爲氏○皇  
御

孫即天子ノ朝廷ニ對シテ火神ノ御心勇進  
進物 波○其鎮火祭ノ幣物ト  
ビ給ハシ暴ビ給フ事ハ有ルマイト致シテ 御前ニ進呈ル物ハ

明妙照妙和妙荒妙五色物乎備奉氏○明ト色  
ノニホ

ヘル織物照ト澤ノ光レル織物和ト絲細ニ織レル絹荒ト絲太ニ織レ  
ル布ノ青黃赤白黒ノ五色ニ染ナセル物ヲ不足モナク備ヘ奉ツテ 青海

原爾住物者。鯖廣物。鯖狹物。與津海菜邊

津海菜爾至爾 氏○蒼々タル大海ニ住居ル物ハ鯖ノ廣イ大魚  
嗜ノ狹イ小魚澳深ク生ズル海菜類渚近ク

生ズル海菜類 御酒者應邊高知應腹滿雙 氏○御酒  
ニ至ルマデモ

ノ口方高クシレルク居エタテ腹ニ 和稻荒稻爾至爾 氏○  
十分ニ滿テ其變テ幾何モナラベテ

和稻即十米荒稻即 如横山置高成 氏○横タハレル山ナドノヤ  
ナ叙ニ至ルマデモ

天津祝詞乃太祝詞事以氏稱辭竟奉久止

申。皇御孫命御天降ノ時高天原ニテ神漏岐神漏美ノ御傳遊サレタル天  
之祝詞ノ太貴キ祝詞辭ヲ用テ此ノ如ク稱辭ヲ竟ヘ盡シ奉ルト白ス

○道饗祭

内裏ノ外廓即外重ノ四隅ノ道上ニテ六月晦日  
ト十二月晦日ニ疫神惡鬼ナドヲ廓内ヘ入レン

トア本文ニ音ヘル如ク衛  
神ト久那止神トヲ祀ル祭

高天之原爾事始氏。天上高天原ニ於テ此祭ノ  
皇御孫

之命止稱辭竟奉。皇御真之御事即皇孫邇々藝尊ヨリ御教ヘ  
傳ヘ遊パンタ御命令トア後代マデ如此ク

○神祇令云夏季夏道  
饗祭、漢解云、謂  
京城四隅道上  
而祭之、言欲令  
鬼魅自外來者  
不敢入京師、  
故豫迎於路、  
而饗也。  
○同云冬季道饗祭

○此氏もじを稱辭  
竟奉の語へかけ  
て見るべし又止  
はトアの意なり

稱辭竟奉ヲ祭。大八衢爾湯津磐村之如久塞坐皇  
リ給フ所ノ

神等之前爾申久。大八衢即大道ノ彌ト總筋ニモ別ル道股ノ  
處ニ湯津ト數多キ磐津ノ堅固ナルガ如ク守

八衢比古八衢比賣久。護ノ神靈ノ滿塞リテ塞在テ御出ナサ  
ル皇ト尊キ神等ノ前ニ白ヌフハ

那斗止御名者申氏辭竟奉久。○神代紀云、投其杖、  
股靈女ノ義勿來處ノ

根國底國與里麤健疎。義ナル三神ヲ八衢比古八衢比賣久那斗  
ト御名ヲ白シテ贊辭ヲ竟ヘ究メ奉ルハ

相率相口。備來物爾。○世間ノ禍災ノ起原タル根國底國即テ黃泉  
ヨリ暴動ビ疎遠ビ來ントスル鬼神邪鬼ニ

○古事記云爾千引  
石引塞其黃泉比  
其坂、云々亦所  
塞其黃泉坂之石  
者、号道反大神  
亦謂塞坐黃泉戶  
大神、  
○同云於投棄御杖  
成神名衛立新戶  
神、  
○神代紀云、投其杖、  
是謂股神、股神此  
是謂股神、云布那  
加微  
○同云投其杖曰自  
此以還雷不來、  
是曰股神、此本名  
号家名戶之祖神  
焉、  
○按に正則は口會  
事とシテアヘ

マノトと訓た  
れ此處にて  
マノの敬言は  
増くべき事なり  
又アノはアハス  
の約言と心得べ  
し

此の止むじにて  
機園座圖云々よ  
り此處までの天  
津祝詞の古語を  
當日の語につ  
けたり

會事無氏○上ノ三神ガ此ヨリ彼ニ相交疑リ相合口事ナレ  
テ彼ノ惡事凶言ニ同意レ合休スルコト無クテ  
下行者

下平守理上往者上平守理夜之守日之守

爾守奉齋奉禮止○鬼神ガ地下ヨリ通ヒ來ナバ地下ヲ守リ邪鬼ガ  
地上カラ通リ來ナバ地上ヲ守リ夜ノ間ハ夜ノ

守リ盡ノ間ハ盡ノ守リニ間斷ナク天子様ノ城廓ノ内外ヲ堅固ニ守リ奉リ禍  
災ヲ忌避ツテ齋ヒ護リ奉レト○上ノ機園底圖云々ヨリ此處マデハ下ニ天津

祝詞ト指セ  
爾爾ナリ  
進幣帛者明妙照妙和妙荒妙爾備

奉○御衣服ノ料ト色ノ美ク明絹澤ノ清ク照絹  
絲ノ細中精布絲ノ太中粗布ト色々備奉リ  
御酒者臨邊高知

應腹滿雙氏汁爾母穎爾母○御酒ハ邊之口ヲ高ク灼居エ獲  
之腹ニ滿セテソレテ並ベテ汁

ト酒ニテモ穎  
ト切穂ニテモ  
山野爾住物者毛能和物毛能荒物○

山間野邊ニ住居ル物ハ毛ノ柔イ  
物即チ鳥類毛ノ剛イ物即チ獸類  
青海原爾住物者鰭乃廣

物鰭乃狹物奥津海菜邊津海菜爾至万氏○

蒼海ノ渺々タル處ニ住メル物ハ鰭ノ廣イ大魚鰭ノ狹イ小  
魚又沖中ニ生スル海菜岸近ク生スル海藻ニ至ルマデモ  
横山之如

久置所足氏進字豆乃幣帛乎平氣久聞食

此爾母ハ次の句  
をも隔て、置  
所足氏進といふ  
句へつゞくなり

此氏もじと句と  
隔て、皇御孫命  
の句へかゝる

氏ア○横ニタハレル山カナドノヤウニメクサンニ置キ足ラハセテ献上スル  
珍トト清ク美シキ幣物ヲ御心ノ内ニ平ラカニ聞シ食シ御享ナサレテ  
大オホ

八衢ヤチマ爾湯津磐村之如久塞坐サヤリマシテ氏ノ○内裏ノ外ノ重ハ即ハ外ノ郭外ノ大御道股

ニ湯津ト數多ノ磐群ノヤウニ御神靈ガ  
横ハリ塞在テ御出ナサレツト守マシテ  
皇御孫命乎堅磐爾

常磐爾齋奉茂御世爾幸開奉給止申○皇御真之  
御事ノ御

名義ニマシマス天子様ヲ堅磐ノ如クニ常磐ノ如クニ凶ヲ忌ミ  
又親王  
又吉ニ護ヒ奉リ大盛之御壽命ニ幸ハヘ奉リ下サレト祈請申ス

王等臣等百官人等天下公民爾至○  
萬氏ノ

平久齋給部止○又皇族ノ第一等タル親王等第二等タル王等朝廷  
大臣等百官即官省寮司等ニ奉仕スル官員等天

下中ノ百姓ニ至ルマデモ平ヲ○カマツカサ  
ノ神官天津祝詞乃太祝詞

事乎以氏稱辭竟奉止申○神官即ナ此ノ道藝ノ祭典樹ナ  
ル神祇官ノ卜部ガ天之祝詞ノ

太ト尊キ祝詞書ヲ以テ稱贊  
辭ヲ竟ヘ盡シ奉ルト申ス

○大嘗祭  
友嘗トハ上代ノ稱ヲ用テ題セル毎年  
十一月中卯日ニ神祇官班幣ノ新嘗祭

集侍神主祝部等請聞食登宣○ウゴナハリテ居ル新  
嘗祭ノ班幣ニ預ル請

此處天津祝詞  
といふは上の根  
國底國云々より  
守奉齋奉禮  
ノ一段を指せる  
事既にいへるが  
如し

○神祇令云仲冬下  
卯大嘗祭禮云  
三卯者以中卯  
爲祭日不更待  
下卯  
也  
○同云凡天皇即位  
嘗祭天神地祇

云、謂即位之後、仲冬乃祭、下、所附大嘗、每世一年、國司行、事是、同云、凡大嘗、每世一年、國司行、事、以外、每、年所、司行、事、謂、所司、者在、京、謂、預、祭、事、也、  
 四時祭式云、新嘗祭、其幣、乘、上、神、三百、四、座、大、社、一百、九、十八、座、云々、右、中、卯、日、於、此、官、齋、院、官、人、行、事、諸、司、不、但、願、幣、及、造、供、神、物、料、度、中、臣、祝、詞、料、准、三、月、次、祭、考、云、三、上、代、に、大、嘗、新、嘗、と、い、ふ、別、ち、な、し、云、々、後、釋、云、こ、と、毎、年、の、祭、の、内、な、れ、ば、毎、年、に、新、嘗、な、る、事、は、論、な、ら、ず、新、嘗、と、願、は、さ、ず、

して大嘗と題されたるも古の唱あれば難はなし  
 記傳云爾聞は新嘗を約めたる以て新相を以て變するをいふ名なり云々  
 中臣書詞云中卯日  
 此の故爾の爾も此は次の句也もをわまた爾て、皇御孫命能宇豆乃幣用といふへか、るなどよくせずはまされぬべし  
 宇豆乃比奉、臣の臣も此は奉止依志といふ語までへか、れり其下へと改ばす

社ノ神主祝部等諸人能ク聞シ食シ心得ヲレヨト先ノリ聞カス○此處ニテ神主祝部等ノ唯ト返答スル式ナルヲ祈年祭ノ條ヲ見テ知ルヘシ

高天原 爾 神留坐皇睦神漏伎神漏彌命

以○上天ナル高天原ノ神境ニ神ト尊クモ靈德ミナミナテ鎮仕座マス天皇之親トマレマス神之男君神之女君ノ御命令ヲ以テ仰付ラレシマム

天社國社 登敷坐留 皇神等前 爾 白久○天神ハ天之社

地祇ハ國之社トソレソレニ舍代ノ地ヲ占メテ其社ヲ領知テ御出ナサルト皇ト尊キ神々等ノ前ニ白ス 今年十一月中

卯日 爾○今年ノ十一月ノ中之卯日即チ第 天都御食乃長御

食能遠御食 登○天照大御神ヨリ皇孫尊へ御依遊キレレ御膳ヲ天之御膳ノ長トモ遠トモ永久ニ召上ルベキ御膳ト遊ハ

皇御孫命乃大嘗聞食 奉爲故 爾○皇御真之御事即天子様ガ今日大

嘗即チ大ト尊アベキ新嘗ヲ聞召レ 皇神等相宇豆乃比奉 召上リ遊ハサウトスル爲ノ其故ニ

氏○皇神等ガ天子ノ思召チ受納レ 堅磐 爾常磐 爾齋 比奉 利 承引レ相ロウツノロ奉リテ

茂御世 爾 幸 爾奉 奉 止 依 志 氏○天子様チ堅磐ノ用クニ常磐ノ如クニ守護奉リ

大盛之御壽ニ幸ハハ奉ラントテ皇 千秋五百秋 爾 平 久 安 神ヨリ皇御孫尊へ稻穀等ヲ寄之テ



久聞食クヨシメシ氏ウヂ○其ノ依サレタル稻穀ヲ千秋五百秋ト千万秋ト豊明トヨノアカリ爾ニ

明坐アカリマサム皇御孫命ミコトノ能ノ宇豆ウツ乃幣帛ノヒタグタ乎ナ○豊ト十分ニ御面ノ赤ル

天子ミコ椽ノ宇豆ト珍貴ヲ極メタル幣物ヲ明妙照妙和妙荒妙アカルヘタルミギクニアラクヘ

爾備奉ニマツリテ氏ウヂ○色ノ美レク明ル絹織ノ清ク照ル絹和ト精レキ朝日アサヒ

豊榮登トヨサカノホリニ爾稱辭竟奉ニマツラフ久乎諸聞食登宣トヨモロキヨシメセトノ○當日ノ

ト豊ト榮エ上ル時刻ニ稱辭ヲ竟ヘ盡レ奉ルト白ス事ヲ諸人聞召レ取フレヨト宣リ聞カス

事別コトワケテ○又別ニ詞ヲ別イヒヘ忌部能弱肩爾太襴取挂氏ケテ宣リ聞カス

齋部イハヒ郎ノ神祇官ノ神部ノツガヒ持由麻波利仕奉禮留幣モナニマハリツカヘマツレルヒテ

帛乎シラ○持ト十分ニ齋清リテ調神主祝部等請氏ヘ仕マツリタル幣物ヲ○此ノ参集セル

神主祝部等事不落捧持氏奉登宣トトナクサマツレトノ○遺漏ノ事ナクサレ舉ゲ持テ奉上セヨト宣

聞カス

○鎮御魂齋戶祭ミコマタイハヒトニセツムルマツリ十一月ノ鎮魂祭ニ式ノ如ク鎮メ奉レ天子ノ御魂ヲ十二月ニ更ニ神祇官

○考云四時祭式に十二月鎮魂齋祭云々右於官齋院中臣行事と云り此神祇官の齋

院を齋戸といふ  
清和天皇紀に神  
祇官の西院齋戸  
神殿とあり是即  
八神を齋奉る所  
なり云々

○讀義云四時祭式  
云々此條の末に  
右於此宮齋院中  
臣行事云々彼欲  
魂祭と御魂を招  
殖す神事此齋戸  
祭は其欲魂祭と  
結びたる御魂緒  
を齋戸に欲祭る  
にて云々十一月  
宮内省にて行は  
る、欲魂祭の魂  
筥を十二月に當  
て神祇官齋院に  
欲め替るなむ此

ノ西院即齋處ト稱スル  
八神殿内へ鎮メ奉ル祭  
**中宮春宮齋戸祭亦**

○同 皇后皇太子御所ノ齋戸ノ  
祭ニ同シ様ニ執行ヒ奉ル

**高天之原兩神留坐須皇親神漏伎神漏美**

**能命乎以氏** ○高天原ノ幽界ニ神ト御鎮坐遊ハス天皇之親神之男  
君高皇產靈尊神之女君天照大御神ノ御命令ヲ以テ

**皇御孫之命 波 豐葦原能 水穗國乎安國止**

**定奉** 氏 ○皇御孫尊ハ豐ト美稱スル葦原之瑞穗國即大日本國ヲ安國ト  
治メサレニト定メ奉ラレテ○此ノ氏字ハ他ノ例ト別ニテ下

ニ受クル處ナレヌノニテ音ヒ  
スタタル氏トレテ見ルベシ  
**下津磐根 爾宮柱太敷立**

**高天之原爾千木高知氏 天之御蔭日之御**

**蔭止 稱辭竟奉** 氏 ○此神祇官西院ノ八神ノ齋處ノ爲メニ地下  
之岩ニ深ク掘リ入レテ其柱ノ太キガ如ク

知キ坐ヘク宮柱ヲ立テ高天原即御空ニ高ク千ノ木ヲ擧ゲテ其千ノ木ノ高キガ  
如ク其宮ヲ知領レ奉リサテ其宮ヲ大ニ蔽フ眞蔭ヨリテ遮ル眞蔭ヨリ稱

辭ヲ竟ヘ盡  
**奉御衣 波 上下備奉** 氏 ○奉ル御衣服ハ上ハ即  
御衣下ハ即御禪御裳

等ヲ取リ揃  
**宇豆 乃 幣帛 波 明妙照妙和妙荒妙**  
へ備奉リテ

院を齋戸といふ  
清和天皇紀に神  
祇官の西院齋戸  
神殿とあり是即  
八神を齋奉る所  
なり云々  
○讀義云四時祭式  
云々此條の末に  
右於此宮齋院中  
臣行事云々彼欲  
魂祭と御魂を招  
殖す神事此齋戸  
祭は其欲魂祭と  
結びたる御魂緒  
を齋戸に欲祭る  
にて云々十一月  
宮内省にて行は  
る、欲魂祭の魂  
筥を十二月に當  
て神祇官齋院に  
欲め替るなむ此

くなるを今とた  
い本文とすすけ  
て解せりとは隨  
隨の説もあれば  
しとらくそれに  
繼てなり

五色物 イッイロノモノ ○珍貴ノ幣帛ハ明ト色ノ美レ、キ絹帛ト光ノ清キ絹帛ト類  
精レキ和布粗キ荒布青黄亦白黒ノ五色ノ絹帛類 御酒 波

臨邊高知應腹滿雙 ミカノヘ 氏 ○神酒ハ麩之口高ク居エ 山野物  
麩之腹ニ滿タセ血ベテ

甘菜辛菜 ハアマナ カラナ ○山ヤ野ニ生ル物ハ味ノアチヒハラノモノハハツノヒロ  
甘イ菜類味ノ辛イ菜類 青海原物 波 鱈廣

物 鱈狹物奥津海菜邊津海菜 爾至 モノ ハツノサ モノ オキツツ モノ ハハツツ モノ ハハツツ 爾至 ニイタルマデ 氏○

雜物乎如横山 アツクサノモノモノチヒコヤマノゴトク  
著海ノ物ハ鱈ノ廣イ魚鱈ノ狹イ魚澳深ク生ス  
ル海草類邊ニ近ク生スル海草類ニ至ルホドニ

置高成 氏獻留宇豆乃幣帛 オキカカナン 氏 アタマツル ヲウ豆 ノ 幣帛 乎 ○種々ノ幣帛神饌ヲ横  
山ノヤウニ御前へ置

安幣帛能足幣帛止平久聞食 ア高クシテ奉ル此結 氏 ○御心ニ安ク思召ス幣物ノ満足ナル 皇 良我 朝廷 乎 ○天皇之朝  
構ナル珍貴ノ幣帛ヲ

常磐爾堅磐爾齋奉茂御世爾幸閉 トキハニ カキハニ 皇太子ヲ 常磐ノ如ク堅磐ノ如クニ護ヒ奉リ茂 自此十二月

奉給 氏 マツリマヒテ ○常磐ノ如ク堅磐ノ如クニ護ヒ奉リ茂 自此十二月  
大之御壽命ニ幸ハヘ奉リ下サレテ

始來十二月爾至 ハツメテキタラムシ 氏 ○今年ノ十二月ヨリ始マリテ  
來ン年ノ十二月ニ至ルマデ

平久御坐所令御坐給 オホヒラケク オホマシマストコロニオホマシマサシメタマヘト 止 ○八神等ノ大坐マス此ノ  
齋戸ニ天皇様又中宮皇

太子ノ御魂ヲ平ラケク  
大坐マサセ下メサレト  
今年十二月某日齋比鎮奉

トマタヌ  
止申  
○今年ノ十二月ノ何日ノ日ニ十一月ノ鎮魂祭ニ結奉タ  
天子又中官皇太子ノ御魂管ヲ如此鎮メ奉ルト申ス

延喜式詞祝諺解卷之中 畢

